

参加するグランシップへ。

CHANCE IS HERE!

グランシップから県民へ。県民がグランシップへ。
ツーウェイの関係が文化を育てる! 未来を楽しくする!
そして、チャンス・イズ・ヒア。ここから何かを始めよう。

DIGITAL GRANTVOYAGE sing'99

Moving Music Express

2 舞橋

グランシップから県民へ。グランシップが発信して、県民が受けとめる。

そういうワンウェイの関係オンリーでは、ちょっと寂しい。

振り向いてくれるのをひたすら待つ。片思いも素敵だけれど、

それだけだと恋はなかなか育ってくれない。

同じように、一方通行の文化の発信にはその高まりに限度がある。

県民とグランシップと。その関係がツーウェイになって、

相互の交信が活発になっていくと、

そこからいろいろなものが育っていく。

だから、もっと参加するグランシップへ。

そのチャンスは、「」にいっぱいあるのだから。

ちよつとカタイ話になるが、公共

のホールや劇場を運営していく際、課題となるのは施設の活動や事業をいかに広く浸透させ、地域に根づいたものとするか、である。そこで、その具体的な方策として、近年では県民ボランティアを採用したり、ワークショップを開いたり、県民オペラやミュージカルなど地域の人々がステージに立つチャンスを設けたりという、いわゆる「参加型事業」を重要視するところが多くなってきた。つまりツーウェイの関係づくりである。

実際に80年代後半以降、公共施設の急増に伴ってこうした参加型事業

への動きは、日本のあちこちで目につ

くようになっていく。日本人は誘われてもなかなかウンとは言わない人種だから、そうカンタンに手に手をとって一気に盛りあがる、という風にはいかないかもしれない。しかし、差しだす手が多ければ、それだけ握り返してもらえるチャンスも多いということ。グランシップでも、開館記念式典に県内の伝統芸能の継承団体やアーティストらが参加し、まさに県民と手を取りあつての船出を果たし、以来、折にふれていろいろなカタチで県民参加のプログラムを打ち出してきた。その結果、差しだす手の向こ

うに多くの躊躇を感じることもあれ

ば、思いのほか強い力で握り返してもらえて大いに感激ということもあった。もちろん参加チャンスはまだまだ少ないし、バリケーションも足りないで、そうしたメーコを充実させていくことは今後必要ではあるけれど、回を重ねていくこと、もっと広くアピールして参加を呼びかけていくことによって、何かが育まれていく、そんな予感はある。

さて、一口に参加型事業と言っても、タイプ・性格によてさまざまである。まず、県民オペラなどに見られるようなステージ創造型がある。こ

ういうものの場合、演出や指揮、あ

るいは出演者などの重要なパートの一部を外部のプロが担当しながら、県民が合唱や管弦楽など舞台公演の一翼を担うカタチで参画するということが多い。これは県民にとっては自らがステージに立つチャンスとなるとともに、第一線で活躍するプロとの共演がよい刺激になり、スキルアップ、レベルアップにつながることもできる。グランシップで昨年行なわれた『Moving Music Express』もこれにあたり、出演者・観衆の好評により2001年の新作公演も決定。また、この冬には、静岡県100

感動のステージに立つ! ①



楽器、歌、踊り自信あり!なら、コレ。目下、参加団体募集中。

Moving Music Express

グランシップ・オープンイヤーの昨夏、大ホールで繰り広げられた総合芸術パフォーマンス『ムービング・ミュージック・エクスプレス』。プロとアマ、約500名の参加によって繰り広げられた壮大なステージは、参加者はもとより広く話題を呼んだ。そして、多くの呼び掛けにより、このたび次回公演が決定!新たなテーマ、ストーリーのもと、現在参加者を募集中。パフォーマンスとしての感動をぜひ、このチャンス。



募集ジャンル A:合唱団(一般・学校・児童) B:マーチングバンド
C:吹奏楽団 D:舞踊団 E:朗読、本読み F:社交ダンス
参加条件 2001年9月23日開催のステージに参加が可能で、リハーサルに積極的に参加する意志のある静岡県内グループ(5人以上)
問い合わせ (財)静岡県文化財団企画広報課 TEL054-203-5714

'99年のステージでは、〈二十一世紀の若者たちに捧げる〉をテーマに、谷川俊太郎の詩集「二十億光年の孤独」をモチーフにしたストーリーを脚本化。宇宙の誕生から太陽、惑星が生まれ、生命が育まれ、怒り、哀しみ、希望、喜びへと向かう“動く音楽パフォーマンス”を繰り広げた。総合演出にマーチングバンド界の第一人者である山崎昌平氏、朗読に俳優の榎木孝明氏。県民アマチュアの参加者は、世代とジャンルを越えて小学生から熟年までと幅広く、総勢500名。マーチングバンド、吹奏楽、合唱、舞踊に多彩な顔ぶれが揃った。



年音楽祭』が開催されるが、ベートーヴェンの第九に静岡・清水市民の約350人が合唱で参加する。

一方、ワークショップなどの体験・学習型では、創作過程の体験や学習に重点が置かれるもので、ときには成果発表の場として公演がプログラムに組み込まれていたり、「コンペティション」とドッキングしたワークショップというものがあつたりする。が、基本的には個人としての表現活動をフオリするという活動である。昨年Q'sing99では、デジタルアートのコンペティションを行い、その選考審査発表の後、第一線で活躍するビッグネームによるワークショップを開催したところ、参加した10代、20代の若者たちから圧倒的な支持を得た。次世代の発想を刺激し、アートを中心とする創作活動をバックアップする。singoは、一過性のものではなく、グランシップならではの事業として今後さまざまなカタチで継続される予定なので、ぜひ注目してほしい。

そして、ステージ創造型、体験・学習型とは性格が少々異なるが、空間を開放したり、イベントの一部への参加を呼びかける施設、開放型の事業も、公共施設と県民とのツーウェイの関係づくりに欠かせないものの一つである。例えば、グランシップでは、文化の広場』と題して館内を無料開放し、多彩な参加メニューを用意している。オープンステージでグループパフォーマンスを披露してもよし、数あるワー

感動のステージに立つ! ②



二十世紀の終わりの大合唱。
350人が第九を歌う!

静岡県100年音楽祭

グランシップにおける今世紀最後の音楽大イベント「～さよなら2000年、いざ21世紀～静岡県100年音楽祭」。第一部ではチャッパリ節など静岡県に生まれた歌と、世界の歌姫として知られた三浦環ゆかりの名曲を。第二部ではベートーヴェンの第九の合唱団員を募集し、〈第九を歌う会〉を結成。週に一度のペースで練習を重ね、12月の晴れの舞台で歌声を披露する。※このイベントの内容については、P17を参照のこと。



施設を利用する！



手ごろで充実、キレイ。
なら、使わない手はない。
練習室、会議室…etc.

ちょっと15ページをご覧ください。これはグランシップ内の施設を利用した場合の料金の一覧であるが、利用しやすい料金設定になっている。ホール付属の楽屋は別としても、練習室などは小さいほうなら、午前9時から12時まで3時間たっぷり利用しても1,200円。8月のある午後、この練習室（但し、広いほう）を覗いてみると、女性グループがちょうどフラメンコの稽古中だった。午後の1時から5時まで使って3,100円という料金設定に、「キレイで、設備的にも十分で、しかもこのお値段なら大満足」「駐車場があるのもうれしい」「すでに先の予約も入れてあります」とのこと。練習室では今のところ希望日がそのままOKとなる可能性は高い。がしかし、会議室や展示ギャラリーとなると競争率は高くなるので、早めの申し込みが正解だろう。なお、予約申し込みについてはP19を参照のこと。



練習室1

空間を利用する！



のんびりお茶するもよし、
アート作品を展示するもよし。
オーシャン・カフェ

高さ58mの大ホール、この大空間をカフェスタイルで県民に開放しようというのが、2000年10月からスタートする『オーシャン・カフェ』。1、5、8、11月を除く毎月1回行なわれるもので、自然光が注ぐ中、アコースティックなライブ演奏も楽しめる。コーヒーや紅茶、ジュースなどドリンクメニューも充実。また、さまざまなジャンルのアーティストにこの空間を開放。ワン・デイ・ギャラリーとして作品を発表したり、販売したりできる。記念すべき第1回は10月29日（日）。大空間ならではのくつろぎをエンジョイしつつ、好奇心を心地よく刺激する。そんな一日はいかが？



開催：年8回（文化の広場開催月除く）11:30～18:00
第1回は10月29日（日）
演奏：ランチタイムコンサート 12:00～13:00
アフタヌーンコンサート 15:00～16:00
トワイライトコンサート 17:00～18:00

自分の時間を活かす！



楽しく、前向きに。県民の立場で運営に参加。
グランシップサポーター

グランシップの運営にボランティアの立場で参加する（グランシップサポーター）。現在、第1期から第3期まで約150名が、情報の収集・整理からダイレクトメールの発送、館内案内をはじめ、イベントでの接客対応、撮影記録、託児業務など、日々幅広く且つこまやかに活躍している。そして、「活動を楽しんでいる」「自己充

実に役立っている」と、前向きに取り組んでいる。目印は背中にGranshipのロゴ入りスタッフジャンパー、または黒いレセプション・スーツ。今のところ、次期サポーターの募集は未定だが、こういうカタチで県民がグランシップに関わることができるということも、ぜひ多くの人に知ってほしいと思う。



第2期サポーター



第3期サポーター

イベントにアイノリする！



ステージで自分をアピール。
文化の広場

①お正月広場 1月 ②トレインフェスタ 5月
③夏祭り 8月 ④スポーツ（インラインスケート） 11月

グランシップを無料開放して行なわれる「文化の広場」は、年に4回のペースで定期的に開催。グランシップの東静岡駅側の広場ではフリーマーケットが、また大ホールまたは広場では最新の照明・音響設備によるオープンステージが設けられ、館内では150インチの大画面によるハイビジョンシアター、グランシップのバックステージなどをガイドつきで巡る親子探検ツアー、ワークショップなどのほか、折々の趣向でさまざまな楽しみが。出店したい人、パフォーマンスを披露したい人は、事前に申し込みを。但し、内容は毎回変わるので、（財）静岡県文化財団（TEL054-203-5714）まで問い合わせを。



自分のチカラを試す！②



sing2000

昨年の『sing'99』は、藤井フミヤ氏をナビゲーターに迎えた“デジタルグランボヤッジフェスティバル”の1プログラムとして、次世代の若手クリエイターの育成、交流に向けたコンペティション＆ワークショップを開催。3つのカテゴリーからなるコンペには多くの作品が寄せられ、江並直美、日比野克彦、中島信也というビッグ3が審査にあたった。グランシップ・プロモーション・アイデアコンテストでは、入賞者による公開プレゼンテーションの後、最優秀グランプリを選出。「恋・輝橋」への展開。（当作品はクリスマスイヴの夜を彩るイベントとして実現。）また、当時のワークショップでは、グランプリに輝いたアイデアをプロモートするためのポスターをライブで実制作。なお、本年は学生＋プロによる光を生かした空間プロデュースを企画中。追ってリリースされる情報に注目。

①sing'99グランシップ・プロモーション・アイデアコンテストの最優秀グランプリは内海里美、伊藤辰巳、渡会真矢の3人による「恋・輝橋」に。写真はワークショップにおいて実制作されたポスター。
②sing'99 CGアート作品コンテスト最優秀グランプリ作品「21世紀生き残り新聞」林ゆかり、小林寿子、宗野梨江、山本敦子
③sing'99デジタルフォトコンテスト最優秀グランプリ作品「無題」藤浪顕夫



①



②



③

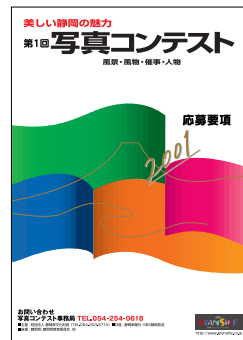
自分のチカラを試す！①



静岡のステキなシーンにハッとしたら、カシャ。
美しい静岡の魅力

第1回 写真コンテスト

募集テーマ「美しい静岡の魅力を撮る！」
静岡県の風景、風物、催事、人物、歴史的な行事などを題材とした写真を募集。但し、2000年7月15日～2001年7月31日の期間中、静岡県内において撮影されたものに限る。

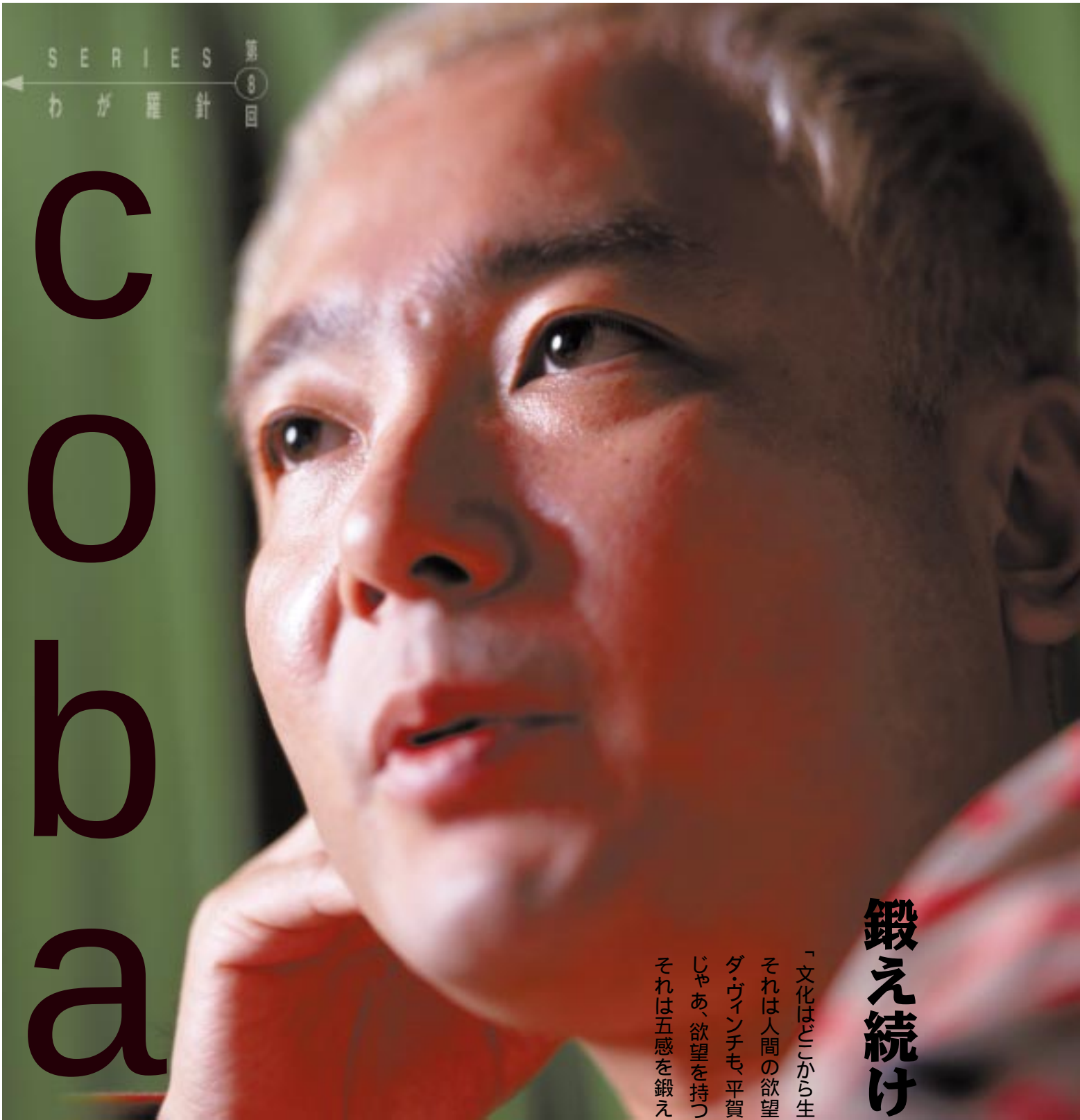


賞	最優秀賞（1点）賞状・賞金100万円 徳川慶喜賞（1点）賞状・賞金50万円 下岡連枝賞（1点）賞状・賞金30万円 優秀賞（5点）賞状・賞金10万円 入選（60点）賞状・賞金1万円 佳作（200点）賞状・記念品
締切	2001年8月31日（当日消印有効）
審査員	大竹省二、田中光常、田沼武能、沼田早苗、蜂須賀秀紀、天野一、山本肇、徳川慶朝（顧問審査員）
応募条件	●作品はすべてプリントで、未発表の自作品に限る ●サイズは四ツ切（ワイド版不可）、カラー、モノクロ可 ●単写真のみ（組写真不可） ●額装、パネル貼り、台紙貼り作品不可
応募料	1作品につき2,000円（郵便小為替のこと）
応募要項の請求	下記写真コンテスト事務局にお問い合わせの上、応募要項・応募票をお取り寄せ下さい。応募方法は応募要項をご覧ください。
問い合わせ	写真コンテスト事務局 TEL054-254-0618

クシヨップに参加してもよし。また、この10月からは大ホールを開放して、音楽とアートをカフェスタイルで楽しむ、オーシャン・カフェも始まる。こちらはただブラリと立ち寄って一息入れてもいいし、音楽やアートで参加してもいい。大きな花火を打ち上げることだけにとられず、こうした楽しみのタネを蒔いていくことも大切。要するに、普段「や日常」をいかに文化的に豊かにするかである。先に日本人は誘われてもなかなか重い腰を上げないと言ったが、本当はそうでもなく、実際、文化事業への静岡県民の関心は予想以上に高くなり、意欲的である。といつもの、グランシップ開館前、文化・芸術活動に深い関心を寄せている県民を対象に「グランシップサポーター」を募集したところ、定員60名に対して240名

と、予想を大きく上回る応募があった。行政と企業と県民と。それぞれがそれぞれのカチで運営に参加できる体制づくりがやはりグランシップには欠かせない。そうしたシステムの大仕事は一翼を担う役割に対して、積極的に手を挙げてくれた人たちが数多くいたという事実は、グランシップの大きな励みであり、支えでもある。前回『Moving』で総合演出を担当したマイチングバンドの草分け的存在で第一人者でもある山崎昌平氏は、こうした事業をきうかけに横のつながりが生まれ、互いに協力、刺激あつて新しい文化を育んでいくことに価値がある。そしてこのイベント（Moving）のように、いろんな人々の参加によって行なわれる場合、最も大切なことは出演者が楽しむこと。ストーリーよりも優先させるべきは出演者のエネルギー。人が集まったときのエネルギーは大きなチカラになるから」と語ってくれた。

グランシップに多くの人々のエネルギーが集まり、そのエネルギーが新たなチカラを生む。そうした湧き立つ空気を常を感じさせる場所でありたい。そして、そのためのタネをグランシップは引き続き、あなたが参加するチャンスはいつだって「ここ」にある――CHANCE IS HERE！その二つのチャンスが一人でも多くの人に活かされることを願っている。



鍛え続けられる五感。

「文化はどこから生まれてくるかというと、それは人間の欲望から...。ダ・ヴィンチも、平賀源内も、間違いなく欲深かつたはずで、じゃあ、欲望を持つにはどうすればいいかというと、それは五感を鍛えることなんです」

身体の延長線上にある楽器。

気がつけば、彼のアコーディオンを聴かない日はないほどである。テレビの番組やCMにどれだけ多くの彼の作品が使われていることだろう。取材の中で彼は、マルチ・クリエーターなんてバフリーでカッコ悪いだけ。ダ・ヴィンチも昔のマルチ・クリエーターには違いないけど、飛行機を作っても、絵を書いても、どれも彼の匂いがしたんだよねと語った。なるほど。彼のアコーディオンに惹かれるのは、単に音色や旋律が魅力的なだけではない。cobaというアーティストが放つ確かな匂いのせいだったのだ。

——アコーディオンというと、長い間日本では伴奏楽器としてのイメージが強く、ソロ

楽器としての魅力はまさにcobaさんの登場によって知った、みたいなところがあると思うんです。となると、当の本人cobaさんはどんな経緯でアコーディオンを手にしたのか、とても興味があるのですが。

「父がアコーディオンが好きでよく演奏していたんです。それで小学校4年生の誕生日のときにその父が子供用のアコーディオンを買ってきて、明日からこれを習いなさいと。そのときはこれといった感慨もなかったんですが」

——しかし、やがてイタリア留学を決心なさるわけですね。

「日本には確かにアコーディオンに対する認知の甘さがありましたし、良くも悪くもオジサマたちの楽器というイメージがあつてアコーディオンというと音楽的なものというよりはむしろ便利屋さんのなものの、楽器というより道具という感じでした。ただ僕にとつてそれはとても特別な楽器でした。身体の延長線上というようなね。それに何よりも、人々がどう認知しているところの楽器は大きな可能性を持っていると思ってましたから。だから、この楽器で何かをやってみたいと思ったんです。つまりアコーディオンのことをもっと知りたい、もっと勉強してみたいと」

——イタリアにおけるアコーディオンの教育システムはかなり充実しているそうですね。

「日本には街のアコーディオン教室はあつても、音大にアコーディオン科というものはなくて、僕にしても基礎がまったくなくてなかつたわけです。持ち方とか姿勢とか指の角度とか、もう全然違うわけ。このまま演

奏し続けると身体が壊れるのですぐ止めるように、とまで言われて。一見合理的、ある意味非常に陰險な、我々が正道、みたいな言い方ですね。(笑) まあ、それだけ向こうにはアカデミックな教育がきちつとあるんですね。それでその教育というのが結構理詰めで、まず筋肉のつき方から勉強して、人間の身体というのはこういう風にできているから、こういう方向でこういう力をかけてあげれば一番合理的に楽器とつきあ



コンサートに先立って、10月18日にはCDをリリース(2枚同時発売)。全曲セルフカバーで、1枚はフランス人による作詞でフレンチポップ仕立て。もう一枚はオーケストラとアコーディオンによるカバー。

習方法を示す答が返ってくるんですね」——先ほどアコーディオンは身体の延長線上にあるもの、とあやいました。が、それだけに演奏者の呼吸一つが演奏に影響するという感じがしますが。

「アコーディオンに限らず、どんな表現媒体でも僕は基本的には呼吸、プレスしかないと思ってるんです。呼吸というのは人間のリズムだから、身体や意識がその呼吸と一体となっている人は生まれてくるものが違

えます。違いますか? とくるわけですよ。ですから、ハ、あ、ゆるる通りです。(笑) 向こうに言わせれば、我々西洋では音楽というのは95%位までは理論でいける、しかし残り5%はその人の才能だ。日本ではどうしてあなたのように演奏できるんでしょう」と訊くと、「君は失恋の数が足りない!」みたいな経験論が唱えられたりするわけですが、それがイタリアだとメトロノームを使いなさい」とか、具体的な練

うような気がしますね。もちろんテクノのようにその無機質さを喜ぶ音楽もあるし、その素晴らしい、喜びも僕なりに知っているの、その一見機械的な、つまりユーマじゃないものの面白味も否定はしませんけど。とにかく要はそれをいかに感じているか。だから、プレス一つとっても、それをどう感じているかによって、その人の演奏はもとより、生き方まで変わってくるように思いますね」

アストル・ピアソラ。

——ピアソラをととても敬愛されているそうですね。

「アーティストというより人間として彼が好きですね。性格や立場が僕と似ているし。ピアソラは今までのタンゴをきちんとやった上で、やっぱり面白くないと思うたんでしょ。これまでにない自分の音楽を作りたいと。僕もまったく同じことを思ったから。アコーディオンはね、まだ発展途上なんです。例えばヴァイオリニストなら自分の前にバカドニはいわね、クライスラーはいるわということになる。だけどバンドネオンにもアコーディオンにもそれに匹敵するだけのビッグな存在がいな。少なくともピアソラにとっては不在だったし、僕にも存在しない。もちろん彼にだって敬愛する先輩はいたとは思いますが。でも、敬愛はしても、自分は違つと強く思つたんでしょ。彼の曲を聴けばそれが明らかです。結果、タンゴ業界から総スカンを食つたわけですけど。NHKの、わが心の旅」という番組でアルゼンチンに行つたんですが、これは確かに嫌われるな、と思ひましたね。ピアソラと同世代の人々が今も活動し、自らの作品を発表し続けています。それで彼らなりの個性をもつて音を作っているんだけど、その輝きには全然開きがあるんですよ。もうお話にならないぐらいの。決してその人たちがダメということではなくて、それだけピアソラの才能、存在感は稀有であつたわけです。モーツァルトとサリエリの話がありますが、ピアノの才能を目の当たりにした人は、

「15秒のCMを作るときも、フルオケで作るときも、ある使命感を感じながら、自分の欲求のままに作り上げていくという、その姿勢、そのキモチは同じですね」

【coba】

アコーディオンプレイヤー、ミュージッククリエイター。19歳でイタリア・ベネツィアのルチアーノ・ファンチェルリ音楽院アコーディオン科に入学。80年「第30回C.M.A.世界アコーディオン・コンクール」での東洋人初の優勝の他、数々の国際コンクールで優勝を飾り、同音楽院を首席で卒業。帰国後は国内外でのコンサート活動をはじめ、テレビ、映画、舞台音楽のプロデューサーを務め、91年に初アルバム『シチリアの月の下で』を発表。以来、続々と作品を発表する傍ら、英国女性歌手ビョークのワールドツアーとレコーディングに参加するなどして高い評価を集めた。93年「第34回レコード大賞」特別賞、97年にはイタリア・ミラノ市の「名誉市民賞」を受賞。また『ROOTS?』がフランスの96年の年間ベストアルバムに選出されるなど、世界的に評価されるアーティストの一人。

サリエリが神を呪ったように、ピアノはタン」を殺した男である」と罵って追放するしかなかったんですよ。いずれにしろ僕としては自分に与えられた可能性に感謝し、喜びながら、それと同時に使命感を感じてもいるんです。欲望のもっと強いものが使命感と怨念だと思っただけ、僕は音楽を作るとき、そういう使命感、運命的なものをいつも感じているんですよ」

——この秋、グランシップでcoba光と音のページェント。天使は空から降ってくる』が予定されていますが、ビョークのワールドツアーで出会われたというイギリスの天才照明デザイナー、ポール・ノルマンディル氏とのコラボレーションも楽しみですね。

「コンサートはオーケストラとの共演で、とても華やかなものになると思います。いわゆるクラシック音楽というジャンルがありますが、クラシックとかジャズとかフュージョンとかそういったものは人間が定めた、もうと言うなら、レコード会社が定めたカテゴリーですから、そんなことは自分はどうでもいいと思ってるんです。ただ、オーケストラという面白い素材があつて、それとオーディオンが一緒にやるというのはあまり前例がないことなので、創作意欲を駆り立てられるものがあつたんですね。しかし、それだけではクラシックのコンサートはいちよと大人しいなと。コンサート照明というのがありますが、あれは一番経済的であると同時に、確かに演奏に集中できます。でも、ビジュアル的な部分からは何も考えられてなくて、目をつぶって聴きなさい、みたいな感じがするんですよ。せっかくコン

サート会場を共有しているのにね。だって、そういうそのこと譜面が見えない状態にしたらどうだろうかと。今は明かりが随分進化していて、動画を投影できたりするんですね。じゃあ、それをとことんやってみようというわけで、そのイギリスの友人に参加してもらったわけです。当然譜面は読みにくくなるので、譜面灯を用意したりするんですけど、それはお客さんにはどうでもいいことで、大事なのはお客さんにとっ見え、どう聞こえて、どう認知できるかということでしょう。人間が好きでやつてることなんだから、どうせなら人間が楽しめるものをやりたいと。で、今回のような視聴覚を連動させたコンサートをやるうと思っただです」

——音楽、パフォーマンス、料理などがミックスされた『テクノキャバレー』をこの世紀末には東京で開催するということですが。

「今年の12月21日から31日まで芝浦の鈴江倉庫で公演します。人間の持つている感性は視聴覚だけじゃない、という発想から生まれたのがこの『テクノキャバレー』ですね。そもそも僕は五感を鍛えることが好きなんです。文化はどこから生まれてくるかという、人間の欲望から生まれる。ダヴィンチも、平賀源内も、間違はなく欲深かったはずで、じゃあ、欲望を持つにはどうすればいいかという、五感を鍛えることなんです。いろんなものを見ると目が肥えて、いろんな人に会つと人間が肥えるでしょ。いいものを見ればもっといいものを見たいと思っわけ。人間って刺激に弱いから、1個いいものを見ると次を求めるんです

よ。音も同じでね。凄い音楽に出会つと、

次はもっと凄いことやってくれるんじゃないかと。五感を鍛えることによって欲望の豊かな人、欲望上手になれる。で、欲望を持ったときに人は文化を創るでしょ。そこに互換性を感じて。ならば、五感をトータルで刺激できるようなプロジェクトが世の中にあつたら、凄く面白いんじゃないかなと。それが『テクノキャバレー』の発想のもとですね。そういうえば、静岡って年に一度、大道芸をやるでしょう。あれも『テクノキャバレー』の身体の一部みたいな気がするんですよ。同じ匂いを感じるというか。何かもうと面白いことはないか、楽しめるものはないかと、欲深く探してるみたいなね。もちろん方向は違っただけ、あれを静岡でやっているとっことは、とても興味深い。そんなわけで、静岡のそんな欲深い人たちに今回のコンサートをぜひ楽しんでいただきたいと思いますね」

（テクノキャバレー年末公演のお問い合わせは…：ディスクレージ 03・5436・9600まで）



中部電力^{ニッセイ}*Heartful Festa 2000*
in SHIZUOKA

coba光と音のページェント『天使は空から降ってくる』

新しい感性coba in 静岡

これは、中部電力株式会社がお客さまの日頃のご愛顧に感謝して開催する謝恩イベントであると共に、社会福祉に役立てるチャリティーコンサートです。

2000年10月22日[日]

■会場：グランシップ大ホール・海

■開場：PM5:00　開演：PM6:00